

# 大林太良の考古学・日本古代史研究

後藤 明\*

## キーワード

大林太良、歴史民族学、考古学、縄文時代、邪馬台国

## 目次

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| I はじめに                | 2 古墳時代：「大和上位システム論」     |
| II 『世界考古学大系』時代        | VII 大林における「現場の理論」と中位理論 |
| III 「歴史民族学の諸問題」(1965) | 1 ビンフォードの中位理論          |
| IV 先史時代の社会組織論         | 2 『北の神々・南の英雄』から        |
| V 「縄文時代の社会組織」論考       | VIII おわりに              |
| VI 日本古代史の問題           |                        |
| 1 『邪馬台国』              |                        |

## I はじめに

民族学・人類学の巨人とよばれる大林太良は2001年に他界した。2021年に館長を務めていた網走の北方民族博物館にて没後20年のシンポジウムが行われた（「大林太良・学問と北方文化研究—大林太良先生没後20年記念シンポジウム—」）が、逝去後は『ビオストーリー』の8号（2007）を除くと、大林に関する論文集は管見の限り刊行されていない（cf. 後藤 2022）。その学問の広大さに正面から取り組むのが難しかったからであろう。

そこで本稿のテーマであるが、考古学、とくに日本考古学あるいは古代史に関係する大林のいくつかの業績を見ていきたい。それは大林の膨大な業績の中ではマイナーな部分に見えるかもしれないが、日本の考古学会あるいは古代史研究においては大きなインパクトを残した作品が少なくないからである。

同時に考古学と古代史を取り上げるのは、筆者が大林と最初に接したのが考古学の講義であるという個人的理由もある。筆者が学んだ東京大学文学部の考古学研究室では、大林は「東南アジア考古学」を講じており、筆者が大学3、4年のときにそれを受講した。そのた

め大林の考古学観が他の考古学の講義と区別されることなくシームレスに筆者の頭には入っていたからだ。

大林の日本考古学や古代史における仮説の妥当性やその評価については別途論じることにして、本稿の視座は、民族学・人類学の事例と考古学を具体的に接合させるとき大林が採用していた方法論を「現場の理論」として見てみることである。

大林太良は人類史の再構成を学問上の最終目標（本論集の主旨に従えば「大きな理論」）にしていた。そして大林の学問上の基本姿勢は、若き日に学んだ独逸学派の流れを組む歴史民族学にあったことも周知されている。しかし20世紀の後半に活躍した大林は、歴史民族学以降の人類学理論の流れ、たとえば構造主義を取り入れようとしていたことも事実である。そして本稿では彼の考古学・古代史の業績においては、いわゆるプロセス考古学やポスト・プロセス考古学も取り入れる姿勢があったことを示したい。

## II 『世界考古学大系』時代

戦前の東亜考古学が終焉し、戦後復興期に再び日本人が海外の考古学に興味を持ち始めた1950年代後半

\* 南山大学

に、平凡社が『世界考古学大系』全16巻を刊行した。その第15巻が『アメリカ・オセアニア』の巻であり、編者は文化人類学者の石田英一郎と泉靖一であった。この頃、新大陸やオセアニアの考古学に関しては日本の伝統を受け継ぐ考古学者ではなく、文化人類学者が執筆を担当することが多く、泉靖一の著書『古代インカ帝国』などの著作が書かれていた。オセアニアの章はハワイのビショップ博物館で研究を開始した新進気鋭の篠遠喜彦が「ポリネシア」や「オーストラリア」を担当している（後藤 2020）。なお「ミクロネシア」は戦前から調査を行ってきた八幡一郎が担当している。

一方、大林は新大陸に関しては「環カリブ海」という、おそらく誰も書けなかった章を担当し（1959a）、オセアニアに関しても「オセアニア文化圏」（1959b）と「メラネシア」（1959c）を担当している。さらに「新旧大陸の文化交流」（1959d）、および「アメリカ大陸の民族学と考古学：採集狩猟文化について」（1959e）という総論的な章も担当している。また石田英一郎と共著で「新大陸文化の系譜」も書いている（石田・大林 1959）。

泉や石田、また執筆者であった寺田和夫らは、この後、東大の文化人類学研究室の掲げるテーマとしてアンデス考古学の本格調査に乗り出し、今日までの基礎を築いたのは周知の事実である。

さて大林がカリブ海やメラネシアという直接は関連しない地域を担当したのは師である石田が、語学能力があり世界の人類史を俯瞰できる若手の大林に依頼したものと推測できる。このように大林の論考は「やれる人がいない地域を一手に引き受け」た観もあるが、「オセアニア文化圏」と「メラネシア」の章には大林の学問的背景が発揮されていて興味深い。たとえばオーストロネシア系とパプア系（正確には非オーストロネシア系）が混在するメラネシアについて、歴史民族学派では関心が高いテーマである。そしてパプア系は円筒石斧、後来のオーストロネシア系は方角石斧や石杵、石臼、また土器など後期新石器の文化をもたらした、と書いている（大林 1959b: 114）。またポリネシアについては、移住が複数回行われたという当時主流であった考え方を、ハイネ・ゲルデルン説を紹介する形で説明している（大林 1959b: 116）。

### III 「歴史民族学の諸問題」（1965）

大林太良の学問の特徴は博学から多くの事例を引用し、特定の民族の形成や移動について、歴史的な再構成を行うことであった。表面的に見るとその方法は古典的であり、文化の構造や動態に関する法則めいた理論とは対局の所にあると見える。大林民族学は文化の許容性と可塑性、すなわちある要素なり制度が接合する様式にはかなりの幅がありうる、言い換えると「文化諸部門の不一致」（大林 1965: 121）を基調にしたのであって、文化の構造的な文化変容における、何らかの規則性を否定していたのではない。

さて英語圏において新進主義や機能主義が台頭する前に民族学を代表したのは独逸の歴史民族学であった。その立場は一見すると、いくつかの世界的な文化の波とその混じり合いによって民族の分布や変容を説明する方法である。しかし大林によると文化の全体性を強調するあまり、文化要素を統一している機能的・構造的単一体が想定されるべきではない。それが目指すべきは、あらゆる文化要素を包括する全体的な複合体を目指す「Gestalt 民族学」ではなく、「まとまりをよりはっきり示す部分的な複合」に注目すべきである（大林 1965: 113）。

また、それは歴史的・一時的・個別的な関係性ではなく、「特定の時間、空間の枠組みに拘束されずに、繰り返し見られる〈典型的な過程と状況〉」という形態構造と過程が、構造的連関あるいは意味連関をもった M. ウェーバーのいう「理念型」的概念が基底にあるべきであるという（大林 1965: 118）。民族学におけるその事例として、大林は巨石文化と勲功祭宴との構造的連関を指摘する（大林 1965: 118）。また海浜（パシシル）文化論もその一例であろう（大林・今村・宇野 1984: 157-160; 1990: 121-122; 後藤 2007）。

さらに大林は考古学と民族学の協業に関する議論において、考古学者が明らかにできる物質文化や技術的側面の類似が、文化や社会の他の側面の推測には直接役に立たない、あるいは短絡は危険であると指摘している。その議論においては C. レヴィ＝ストロース（Levi-Strauss）を引用し、アマゾン「Ge 諸族は、最も原始的な技術に、最も複雑な社会構造と、大幅に外来の影響をうけた神話的思考とを結びつけている」という事例をあげている（大林 1965: 121）。すなわち「文化の諸部門間の結びつきは決して恒常的でないから、民族と文化の過去を再構成するに当たっては、それぞ

れの部門、あるいはそれぞれの部分的な複合あるいはその諸要素の再構成を別々に行うことがまず必要」と論じている。そして考古学的な痕跡を残さない部分は民族学および言語学的にのみ再構成される、また文献史料や考古学的な痕跡のあるものについても、まず歴史民族学的な再構成を試みる必要があるとする。そして直接考古学的な痕跡をとどめないものについては、部分的な諸複合ないし諸要素の相互の関係を、分布や内部的な絡み合いからあきらかにして、より包括的な、文化のさまざまな部門にまたがる複合を再構成し、その後それを考古学的な枠組みを比較する、という方法を推奨している (大林 1965: 121)。

#### IV 先史時代の社会組織論

大林太良は1971年対になる二つの論考を発表している。その方法論を表明した「先史社会組織復元の諸問題」(1971a)と、その具体例である「縄文時代の社会組織」(1971b)である。後者の方が先に出版されたようだが、まず理論的視座を表明した前者の論文を先に検討したい。

その中で大林は自らの方法論的視座を次のように語る：「考古学資料にもとづく先史社会の復元が高度の蓋然性を獲得するためには、何等かの形における民族学的知識ないし理論の応用が必要であることは、多くの学者が指摘している」(大林 1971a: 156)。さらに「北アメリカの考古学資料を社会学的な用語で解釈しようとする試みの大部分は、実は民族学者に負うものであったのだ。もっとも考古学者のなかには、ピチオーニやビンフォードのように、考古学的資料の解釈に当たって民族学の助けに対して拒否的な見解をとる学者もいる……しかし、民族学の助けを借りないで、ことに社会組織のような困難な問題に考古学者がどの程度まで解答を与えうるかには大きな疑問がある」(大林 1971a: 156)とする。

このように大林は民族学の重要性を説く一方、「その道は平坦ではなく、また成功した個別研究もそれほど多くない」と指摘(大林 1971a: 157)、その原因は「比較に堪える民族誌データの欠如」と論ずる(大林 1971a: 158)。

そして同年の論文(大林 1971b)に言及し、民族誌資料の選択の基準として(1)ほぼ同じ文化段階にあり、類似した生活環境に生活している民族、(2)同一系統あるいは影響によって、つまり歴史的な原因によって大

なり小なり文化伝統を共有している民族事例、を選択する必要があるとする(大林 1971a: 158)。

そのあと先史時代の社会組織の推測に関するいくつかの議論すなわち J. スチュワード (Steward)、G. クインビー (Quimby)、M. サーリンズ (Sahlins) らの議論を検討している。議論の基本は J. スチュワードの『文化変化の理論』などで提唱された狩猟採集民において、食料資源の質と量、つまり狩猟対象となる資源の種類が多寡、分布や季節変動とバンド社会の構成との関係を基本的な視座としている(スチュワード 1979; 後藤 2005)。

この中でクインビーが極北の海獣狩猟民の双系的社会とカリブーやオオジカを狩猟する集団の父系居住的な居住規制との相関関係を想定したことについては大林も評価する。しかしこのような相関関係が見られるにしても、親族名称などの側面についてはかなりの例外があるとしてこのような関係づけには悲観的である(大林 1971a: 161)。

一方、食料資源が均等分布をして恒常的な傾向があれば、縄張りをはっきり決まり安定的であるので、地域外婚と夫方居住が相関する。食料資源の均等性に季節性がある所では、縄張りやメンバーシップが季節的になるので、集団は離散集合が繰り返され、夫方居住は選好されるが、厳格ではなく地域内婚や妻方居住も許容される。さらに縄張りが存在せず、地域集団の構成が可変的であれば、居住規制やメンバーシップは柔軟にせざるを得ない。これはスチュワードのいう合成バンド、すなわち双処婚で非縄張りの規制をもつ不安定なバンドとなる(大林 1971a: 163)。ただしこのような傾向に対しては B. ウィリアムズ (Williams) によるインド中部の狩猟採集民の事例から、あまり単純化はしないほうが良いと注意を促している(大林 1971a: 164)。

さて上記のように米国の人類学者の議論を踏まえた上で評価しているのがノルウェーの考古学者 G. イエッシンク (Gjessing) の議論である。彼は「社会考古学 (socio-archaeology)」を提唱したことで学史上有名である。なおイエッシンクらが活躍した『ノルウェー的考古学評論 (Norwegian Archaeological Review)』誌は一時期社会考古学の牙城であった。

イエッシンクは同じ集団が残したと思われる異なった種類の遺跡ないし遺構を統合的に理解しようとした。すなわち集団が分散的にならざるを得ない夏場の住居(露天遺跡および動物遺跡)と集合的に住んだで

あろう冬場の遺跡(芝土や石で作られた集合した家屋)の対比である。このような状況は獲物の量の振幅が大きかった北ノルウェーの状況であり、そこでは社会集団が閉鎖的ではありえず、新たな成員の加入を認めないと集団が維持できない。そのために単系的な系譜に基づく氏族集団の発達は不利であり、むしろ双系的な構成原理、そして結合の主体は親子(垂直)ではなく、兄弟姉妹(水平)を基本としたであろうとする(大林 1971a: 165)。このような推論を大林は「(イェシンの)生態学的接近法は、獲物の量の振幅から地域集団のメンバーシップの弾力性を想定するなど、動的な要因も考慮」する優れた研究であると評価している(大林 1971a: 166)。

## V 「縄文時代の社会組織」論考

この論考の冒頭で大林は、縄文時代の社会組織論を論ずるためのモデルとして選ぶ民族誌について、W. コパーズ (Koppers) のいう、拘束された比較について論じている。これは文化系統の類縁性の有無に関わらず事例をえらぶ自由な比較に対して、系統的に関連ある事例を使う場合であり、蓋然性が高いとする。しかし拘束された比較の中には文化系統を同じくするだけではなく、何らかの生態学的な条件で類似した経済形態や文化段階をもつ民族事例を先史事例の解釈に使うことができると論じている。それはソ連の研究者のいう「経済=文化類型」に相当し、一方、系統的に関連している場合は「歴史・民族誌的領域」とでも呼ぶべきものであるとする。

「縄文時代の社会組織」(1971b)で具体的に選ばれた民族事例は次の3つの事例であった：

- (1) 北米のカリフォルニア・インディアン、
- (2) 北東アジアの漁撈民：ギリヤーク、オロチョン、カムチャダール、等。
- (3) 北方ユーラシアの狩猟民：(2)に対応する内陸集団

この中で(1)カリフォルニア・インディアンは、従来、縄文時代のモデルとして山内清男なども注目してきた事例である。カリフォルニアは日本列島の大部分と同じ温帯の気候帯に属し、海と山、平野と河川が入り組む複雑な地形、そして多様な狩猟採集資源に依存する生活など、縄文時代にもっとも近い海外の事例ではあ

るということは多くの研究者が指摘してきている。カリフォルニア全体が日本に似ているというのではなく、この地の生態系の多様性が縄文時代の多様な生活形態のモデルになるということである。

またカリフォルニアの一部にも当てはまるが、(2)北東アジアの漁撈民は大河のほとりでサケ・マスなど予測できる漁撈資源に依存した、竪穴住居を作って安定的な生活をしている。これは竪穴住居を基本として定着的な生活をしていたと思われる東日本の縄文文化を考える上で参考になるだろう。さらにこのような漁撈民に対応する(3)内陸の狩猟民の事例も参考にするとしている。そして(2)と(3)はある程度縄文人と系統を共有する可能性もあるので比較の事例として有効であろうとしている。なおこれらの民族例が適応できるのは、安定的な竪穴住居や広場を持つ集落、そして貯蔵穴などが出現する東日本の前期中葉以降であるとも指摘している(大林 1971b: 15)。

比較の結果、縄文人は集落単位の居住形態を行い、そのリーダーとしてはビッグマン的な政治組織(首长制以前)があったと論じている。また唯物史観というよりはモルガンの単系的進化論の影響で日本の研究者に強かった原始母系(権)的共同体論に基づく母系氏族批判を批判し、縄文時代は傾向としては父系ないし双系的出自を基本とし、夫方居住婚が一般的であったと推測している。ただしこの推測を裏付ける直接的な考古学の証拠はないので、比較に選ばれた民族事例に一般的に見える傾向からの推測である(大林 1971b: 26-40)。さらに双分組織、秘密結社、などの存在についても推論された(大林 1971b: 55-70)。

大林はこの論考以外にも「人口減少と選択居住：縄文時代の社会組織再構成のための覚書」を『東京大学考古学研究室紀要』に書いている(大林 1985a)。この中では東海と関東地方で、縄文中期から後期にかけて起こった急激な人口現象について、G. マードック(Murdock)の『民族誌表録』にコード化されてHRAFに収められた資料の統計的な分析から、選択的居住婚が起こったのではないかとの見通しを示している。大林は「縄文時代の社会組織」論で選択的居住婚の可能性を示唆していたので、それがとくに強まった時期と地域を特定して論じたのである。

## VI 日本古代史の問題

### 1 『邪馬台国』

大林は日本考古学に衝撃を与えた縄文社会組織論に続き、また考古学・古代史研究に一石を投じる作品を出版した。『邪馬台国：入墨とポンチョと卑弥呼』である(1977)。この本は中公新書という一般にも手に入りやすいシリーズであり、さらに日本古代史最大の謎、邪馬台国を論じていたために多くの古代史ファンも手にとったはずである。筆者の記憶では朝日新聞に「(邪馬台国はどこにあったかは別として)、本書は邪馬台国研究を一步進めたのは確かである」という主旨の書評があったので、さっそく書店で買い求めた。

この著作は考古学資料にそれほど依拠していないので、むしろ古代の東アジア民族誌ないし民族史として読むべき著作である。本書で展開された東アジアにおける倭人の民族史の中での位置づけの簡潔版は『日本の古代』の第一巻『倭人の登場』の中の論考で知ることができる(大林 1985b)。

多くの人々には「邪馬台国はどこか？」論のひとつのように矮小化されて読まれたかもしれないが、他の邪馬台国研究の追従を許さないのは：(1)文身、服飾、身体装飾、弓、暦、骨占いなど『魏志倭人伝』に記された倭人の風習の情報を、詳細に東アジアの民族史の中で位置づけている点、(2)オーストロネシア、とくにポリネシアをモデルとした首長国モデルや聖俗二重王権論の適用可能性を論じている点、(3)「倭国の大乱」という歴史プロセスをインドネシアなどの「港市」あるいは「海浜(パシシル)文化」などをモデルに分析し、「邪馬台国はどこか？」論もその延長で北九州説を唱えている点である。

そして卑弥呼は鬼道を担当し、弟が政治を担当していたという点に関して、琉球王国から東南アジアにかけての二重王権あるいは神聖王権の事例を引いて、実態を考察している。このような考察は自らも編者となっている『日本の古代13巻：心の中の宇宙』に寄せた論考「祭祀の二つの類型」の中でも論じている(大林 1987)。

### 2 古墳時代：「大和上位システム論」

大林の「読書」には英米のプロセス考古学が含まれていたが、彼の大きな関心のひとつ、国家形成論に関しては米英の議論に不満をもっていた。大林は文化や社会の長期的変動に関しては新進化主義的な説明の有

効性はみとめていたが、文化要素や制度間により自由度の高い接合を考えていた。さらにプロセス考古学がイデオロギーや神話を周縁的な現象、すなわち人口や生業あるいは技術的な側面に従属するような扱いをすることに不満をもっていることを筆者は、国立民族学博物館の共同研究のおりなどに度々聞いていた。大林はそれに対してオランダ学派の国家形成論(e.g. Claessen and Oosten 1996)を高く評価していた。この流れはむしろポスト・プロセス考古学の流れと連動する。

それが具体的に表明された論考として「大和上位システムの支配と崩壊」がある。ここでは古代日本における階層社会を上位システムと下位システムとの間の関係で、その動態を捉えようとするものである。そこで依拠された論文のひとつがT. バルガツキー(Bargatzky 1987)の上下システム論とC. レンフリューの周期的崩壊論(Renfrew 1979)である。大林はときおり、自分が読んだ欧米考古学の論文のコピーを筆者に郵送してくれたが、ここで言及する論文もそのようにいただいた記憶がある。

さて当該「大和上位システム論」論文(大林 1994)では、古代日本には大和を中心とする政治組織(=上位システム)と吉備、出雲、筑紫あるいは尾張にはそれに従属する下位システムがあった。さらにその北や西には蝦夷や隼人のような周縁的システムが存在したとする。

大和上位システムと下位システムの間には上位婚的(ハイパガミー)なシステムがあり、上位システムは下位システムから嫁を獲得するが、その代わり婿あるいは嫁を送るような互酬的なシステムではなかった。このシステムで理論上増えてしまう女性は異母兄妹婚を行うか、あるいは独身女性を女性祭祀として神に仕えさせる(例：伊勢神宮の斎宮)などしたのであろう。このようなシステムを維持するために、古王朝時代(後述)大和の三輪山が聖山としてもっていた役割を、中王朝では都の東、すなわち太陽の昇る方位に伊勢神宮で太陽神を祀ることによって変革を行った。

ここで古王朝や中王朝といったのは、大林は上位システムの周期的崩壊を考えていたからである。それは古代王朝は万世一系的なものではなく、循環的崩壊と再統合を繰り返していたという考え方である。大林はそのアイデアを水野祐の「王朝交替説」から得て、それを周期的崩壊論によって再考したのである。

それによると古王朝は4世紀はじめに崇神天皇に

よって創られ仲哀のときに崩壊した。仲哀は熊襲を討つために九州に出陣したが敵の矢に倒れたとされる。そのあと台頭したのが筑紫下位システム系の神功と息子の応神であった。

応神は5世紀初頭に河内に進出、世界遺産となった巨大古墳を造営した。この中王朝は雄略の時代に九州から関東まで覇権を広げた。しかし中王朝は内部の跡取り問題や、交易の柱であった海民の疎外ないし離反による朝鮮半島経営の失敗で弱体化した。労力を必要とした巨大古墳の造営も一因であったかもしれない。

そのあと取って代わったのが越前下位システムの継体であった。日本海側出身の継体は日本海ルートという新しい交易路と瀬戸内ルートを掌握し、新たな政治システムを構築した。この新王朝は磐井反乱などを経て、蘇我馬子が崇峻天皇を倒したときで終わる。

このように循環的崩壊を繰り返したため、古・中・新王朝とも、せいぜい百年程度の短いサイクルしかもたない短命政権であった。これが日本古代王朝のもつ限界ともいえ、それが克服されるのが仏教や律令制の導入といえるだろう。そして再び地方の下位システムが力を持つのが、鎌倉時代であろうとする（大林1994: 110）。

## VII 大林における「現場の理論」と中位理論

### 1 ビンフォードの中位理論

以上、大林の考古学・古代史の研究を縄文時代、弥生時代（邪馬台国）、そして古代王権交代論においてみてきた。そこには民族事例が多く引用されていたが、他の論考からその方法について言及したものを以下、「現場の理論」として見ていく。

1970年代の論文の中で民族誌的アナロジーに懐疑的とされたビンフォードについて考える。大林はビンフォードについて批判的だったように見えるが、以下に述べるように、大林は、とくに「現場の理論」、すなわち大きな理論と実際の考古学あるいは古代史のデータを結びつける「現場の理論」としてしばしばビンフォードに言及しているのである。

ビンフォードは民族誌的アナロジーに懐疑的であったと書いたが、彼が批判したのは考古学資料の解釈に都合よく民族誌的アナロジーを適用するような方法である（Binford 1967; 1968）。たとえば形が似ているという理由だけで、遺物の機能を民族誌から断片的に切り取って解釈に使うような方法である。ビンフォード

が目指したのは、その時点で生きている集団が行っている行動に見られる文化的過程と、その結果として残される考古学的過程の関係を関係づけ、考古学資料の変異を説明していくという姿勢である（Binford 1972）。そしてビンフォード自身は1969–1973年まで極北、イヌイットの間に入って調査をしていたのである（ビンフォード 2021: 100）。その結果が1978年に出された『ヌナミウトの民族考古学』である（Binford 1978）。

そのきっかけとなったのがフランス旧石器研究の大家、フランソワ・ボルドーとの論争、いわゆる「ムステリアン論争」であった。ビンフォードはボルドーらとの論争に、埒が明かないと感じたが、その原因は、考古学資料はそれ自体で何も語らないことがあるからだ、と思うに到ったようだ。つまり実際に生きている文化システムによって、どのように考古学資料が残されるのかを示さない限り、不毛な論争が続くだけだと感じたのだ。そのためには、彼が懐疑的であった方法、つまり民族誌事例を都合よく一対一で考古学的資料の解釈に使うのではなく、どのような条件のもとでどのように考古学的組成に漸移的変化が生み出されるのかを示すということであった。

なおビンフォードがイヌイットの調査に赴いたのは、国際シンポジウム「人間、狩猟民（Man, the Hunter）」（1965年にシカゴ大学で行われた狩猟採集民に関する先駆的な人類学的シンポジウム）において、日本の渡辺仁によるアイヌ民族事例の報告にも刺激を受けた可能性が考えられる。渡辺はすでにアイヌ民族の母村・狩猟用の季節キャンプの対比などからアイヌエコシステム論（ビンフォードのいう文化システムに近い）を展開し、それを縄文時代の組成変異などの解釈に適用していたからである（Watanabe 1973）。

### 2 『北の神々・南の英雄』から

大林がさらに中位理論的な方法論に言及した下りが著作の『北の神々・南の英雄』（1995）に散見できる。

まず北海道アイヌの生活形態を議論する中で、ビンフォードの「柳の煙と犬の尻尾」（イヌイト古老の言葉、「自分の人生は柳の煙と犬の尻尾を見ながら一生を過ごしたようなものだ」）（Binford 1980）への言及がある。

「ルイス・ビンフォードという人がいます。この人はいわゆる「ニューアーケオロジー」（新考古学）というものを始めた人であり、狩猟採集文化とはどういうものかを実際に知るため、自分でイヌイットの調査もしています……低緯度と高緯度の狩猟採集民とでは、

移動の仕方が異なることを指摘している。低緯度は移動するときには集団自体がそのまま全部移動する。高緯度の場合はロジスティック移動、つまり兵站的な移動をする。つまりベースがあってそこに人口のかなりの部分が止まっている。そこから男女が何人かで組をつくって狩りに行ってくる。獲物をしとめてまたベースに戻ってくる。ベースを中心としたロジスティックな移動をする」。以上のように、一口で狩猟採集民とはいっても、北の方の狩猟民と、南の方の狩猟民とでは、かなりの違いがあるのです。いまの移動の仕方という点からいうと、北海道のアイヌの人たちもまた、日本の縄文時代の住民もどちらかという、北のタイプに近いのです。定住性がふつうの高緯度狩猟採集民よりもさらに高くなっているといえるかもしれません(大林 1995: 28-29)。

次に沖縄のグスク時代の鉄器導入に関連して「人類の歴史を通じて、繰り返し同じようなプロセスや状況が生じた場合、そこに何らかの規則性が発見されれば、それを過去の歴史の研究にも応用しようとする立場があります。たとえば、鉄器が、いままで使われていなかったところに入ってくると、いったいどういう現象が起こるか、鉄器導入の際、演じられたプロセスの具体例を比較、分析し、それを通じて規則的な傾向を明らかにし、ある程度一般化するわけです」(大林 1995: 256-257)。

この事例として大林太良は琉球グスク時代における鉄器の導入に関して言う。オセアニアや東南アジアにおいて鉄器導入が多く、考古学者が暗黙に想定するようにすぐには大きな変化はもたらさない。しかし長期的に見ると鉄器の導入後、ひとは戦争方法の変化、あるいは上がった生産効率によって生じた暇な時間が権力誇示に費やされた。その結果、政治システム変化が威信を示すためから贅沢品を蓄積するシステムへの変化する傾向がある(大林 1995: 257-261)。

鉄器が入ってきた場合、最初は生産力が維持されるために大した変化は起こらない。しかし暇ができる。すると「まず権力をえようという意思が顕著にでてくる」権力を得るための方法には2つある。「盛んに儀礼を行って貴重品の豚、犬の牙、貝殻などを見せびらかし、あるいは他のグループと交換したりすることで威信を示して、高い力を得ようとする」「次の段階になると、いわゆる贅沢品が関心の対象となる」、さらに次の段階となると「余剰を資本として投資する場合がでてくる。しかしその場合、生産財への投資はまず

なくて、消費への投資がほとんど」である(大林 1995: 261)。

沖縄の城も必ずしも戦闘用ではなく、儀礼を行う立派な施設を見せびらかす、力の誇示のためではないかと問う：「人類の歴史を通じて繰り返しみられた、同じような状況、同じようなプロセス、そこに存在する規則的な傾向の知識を、沖縄の古代史、ことに非常に材料の少ない「グスク時代」の解釈に適用してみて、それがわれわれの知っているデータと、もし矛盾しなければ、そういう解釈もまた許されるのではないかと考えています」(大林 1995: 263)。この言説は「歴史は繰り返さない、しかしプロセスは繰り返す(History does not repeat but process does)」というプロセス考古学の主張と軌を一にする。

## VIII おわりに

大林にとっての「大きな理論」は歴史民族学的な立場からの人類史の再構成であったことは終生変わらなかった。一方、その戦略として地域や時代を越えて見られる人間行動の一定の規則性とその物質的な現れを、いわば「現場の理論」として使っていたのではないかと思われる。その背景には初期の論文でも言及されているウェーバーの理念型の概念であり、1970年以降はプロセス考古学、とくに「中位理論(ミドル・レンジ・セオリー)」に着目していたといえる(後藤 2007)。

ただしプロセス考古学の中位理論は生態系における人間の適応行動に焦点をあてていたが、大林は政治組織の議論にイデオロギーや神話も含めたオランダ学派に親近感をもっていた。この意味で改めてウェーバーの理念型との連関を再検討しながら、大林がもっとも心血を注いだとされる神話研究の解明をしたいと筆者は考えている。神話研究における「大きな理論」と「現場の理論」に関しては稿を改めて論じたい。

## 参考文献

Bargatzky, Thomas

1987 Upward evolution, suprasystem dominance and the mature state. In: *Early State Dynamics*, H. J. M. Classen and Piter van de Velde (eds.) pp. 24-38. Leiden: E. J. Brill.

Binford, Lewis R.

1967 Smudge pits and hide smoking: the use of analogy in archaeological reasoning. *American Antiquity* 32:

- 1-12.
- 1968 Methodological considerations of the archaeological use of ethnographic data. In: *Man the Hunter*, R. Lee and A. DeVore (eds.), pp. 268-273. Chicago: University of Chicago Press.
- 1972 *An Archaeological Perspective*. Princeton: Seminar Press.
- 1978 *Nunamiut Ethnoarchaeology*. New York: Academic Press.
- 1980 Willow smoke and dog's tail. *American Antiquity* 45(1): 4-20.
- Classen, H. J. M. and Jarich G. Oosten (eds.)
- 1996 *Ideology and the Formation of Early States*. Studies in Human Society, Vol. 11. Leiden: E. J. Brill.
- Renfrew, Colin
- 1979 System collapse as Social Transformations: Catastrophe and Anastrophe in Early State Societies. In: *Transformations: Mathematical Approaches to Culture Change*, C. Renfrew (ed.), pp. 481-506. Academic Press.
- Watanabe, Hitoshi
- 1973 *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- ビンフォード、ルイス・R.
- 2021 『過去を探索する』植木武訳、雄山閣。[原著 Binford, Lewis R. In Pursuit of the Past: Decoding the Archaeological Records. Truman State University, 1983]
- 後藤 明
- 2005 「J. スチュワードの文化生態学再考——近代化による社会変化と人類学的地域研究の先駆者として」『現代社会フォーラム』1: 12-19.
- 2007 「海人たちの起源は何処に：大林太良と海洋文化研究」『ビオストーリー』8: 56-63.
- 2020 「ポリネシア考古学のパイオニア：篠遠喜彦」『ヒトはなぜ海を越えたのか：オセアニア考古学の挑戦』、秋道智彌・印東道子（編）、pp.11-22、雄山閣。
- 後藤 明（編）
- 2022 『大林太良：人類史の再構成をめざして』、アーツアンドクラフツ。
- 石田 英一郎・大林 太良
- 1959 「新大陸文化の系譜」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 2-9、平凡社。
- 大林 太良
- 1959a 「環カリブ海文明」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 73-79、平凡社。
- 1959b 「オセアニア文化圏」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 112-118、平凡社。
- 1959c 「メラネシア：ニューギニア、メラネシア諸島」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 134-144、平凡社。
- 1959d 「新旧大陸の文化交流」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 153-160、平凡社。
- 1959e 「アメリカ大陸の考古学と民族学：狩猟民諸文化について」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 161-168、平凡社。
- 1965 「歴史民族学の諸問題」『民族学研究』30(2): 109-126.
- 1971a 「先史時代社会組織復元の諸問題」『一橋論叢』66: 156-172.
- 1971b 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2(2) 3-83.
- 1977 『邪馬台国：入墨とポンチョと卑弥呼』、中公新書。
- 1985a 「人口減少と選択居住：縄文時代の社会組織再構成のための覚え書」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4: 75-92.
- 1985b 「東アジアにおける倭人民俗」『日本の古代1：倭人の登場』、森浩一（編）、pp. 259-278、中央公論社。
- 1987 「祭祀の二つの類型」『日本の古代13：心の中の宇宙』、大林太良（編）、pp. 207-23、中央公論社。
- 1990 『東と西、海と山：日本の文化領域』、小学館。
- 1994 「大和上位システムの支配と崩壊：初期日本の伝説的歴史における動態」『季刊邪馬台国』53: 103-112.
- 1995 「北の神々・南の英雄：列島のフォークロア12章』、小学館。
- 大林 太良・今村 啓爾・宇野 公一郎
- 1984 「東アジアの先史文化」、『民族の世界史6：東南アジア民族と歴史』、大林太良（編）、pp. 79-160、山川出版。
- スチュワード、J.
- 1979 『文化変化の理論』、米山俊直・石田絃子（訳）、弘文堂。
- 八幡 一郎
- 1959 「ミクロネシア」『世界考古学大系』15巻：アメリカ・オセアニア、石田英一郎・泉靖一（編）、pp. 128-133、平凡社。